

# ぷ ら す α

No. 98  
2014・春

何心なくやさしく行う

出居清太郎ワールドへのご招待3

人生は道づくりであり、橋づくり

に愛されます。

(1) 人生は道づくりであり、橋づくりである。  
道づくりのごとく、尽きることなく続く試練  
であり、また橋づくりのように、完成しなくては  
何の意義もないこともある。

(3) 手の指も、親指の腹とは、どの指の腹も合  
うが、ほかの指の腹どうしは合いません。そのよ  
うに人と人は合わなくても、一人一人が神慮に  
合一することによって、和が生み出されるので  
す。

(2) 皆様も、どうかよく人の心を味わって下  
さい。それが心の栄養になります。そして心に味  
がついてまいります。味のある人はそれだけ人

(4) 難しいことを、何心なくやさしく行う、こ  
れが誠である。

(1) 道は、たとえわずかな区間でも、その出来上がった分だけ便利になる。そして道づくりには終わりは無い。

トンネルや橋は、途中までしかできていないのでは何の役にも立たない。貫通、完成してはじめて役に立つのである。

人生は、道づくりであり、橋づくりである。道づくりのごとく、尽きることなく続く

試練であり、また橋づくりのように、完成しなくては何の意義もないこともある。

何かの資格や免許を取るというのは、人生におけるいわば「橋づくり」に当たるでしょう。

点数が一点足りなかったために、その科目が不合格となり、その一科目の不合格のために資格がとれないということがあります。運転免許証もそうで、点数が少し足りないだけだから、前進だけの免許証を交付しますなどということ

はありません。

つまり人生において、完成させなければならぬ、途中でやめたのでは意味のない事柄があるということですよ。

その事柄については、何としてもやり遂げなければならぬ。そのためには、その途中では、それ以外のことはしないでおかなければならぬ、そのことに集中しなければならぬでしょう。

あれもこれもと、目移りすることの多い現代社会。その中であって、「これだけ」を選択することは一つの勇気と言えるでしょう。

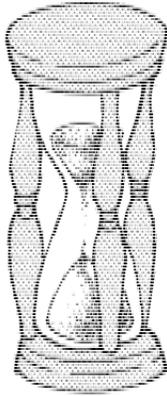
ところで、道にしても橋にしても、それができていくのは、少しずつ、少しずつです。途中を見ていないと、突然、一気にできあがったように見えますが、決してそういうことはありません。

人が成長する、向上するというのも、一歩一

歩です。

確かに、昨日までできなかったことが今日で  
きた、ということもあります。それは外見上は  
無から有へ、0 から 1 への大ジャンプのように  
見えますが、しかし実際のところは、できなか  
った時代の、できるようになるための努力の積  
み重ねの上に立って、「できた」となったはずで  
す。0・1 ↓ 0・2 ↓ …、0・9 ↓ 0・91 ↓  
…、↓ 0・99 という途中経過があつて、つい  
に 1 になったということでしょう。

人の成長・向上は、努力の中に一歩一歩時間  
をかけてなされるものであり、そのようにして



カット 齋藤啓子

なされる成長・向上の中にこそ喜びはあるので  
はないでしょうか。

先ほど、資格や免許は取れなければ意味がな  
いと言いました。しかし、そのために勉強した  
こと、努力したことは決して無駄ではないはず  
です。その途中で得た知識や技術は、最終的に  
不合格になったからといって、消えてしまうわ  
けではありません。そこで知り合った友人は友  
人であり続けるだろうし、その間に味わった喜  
びや苦しみや悲しみは、人生の貴重な経験とな  
ります。

人生において、何かに挑戦して、つまり橋を  
かけようとして、失敗することは多々あります。  
しかし失敗をおそれる必要はないでしょう。失  
敗しても挫折感を持つ必要もないでしょう。や  
つただけのものはできているのですから。それ  
だけの道はできたのですから。

(2) 言動を見聞きするだけでなく、その人の心をよく味わうことが大切です。そのためには、人の心に裸になって飛び込んでいかねばなりません。

酔っぱらって暴言を吐く人でも、その人の心を深く味わってみると、その人を大切にしてあげようという気持ちになれるのです。

心の浅い所へ入っただけではパシヤパシヤと音ばかり大きくて、飛沫が立つばかりです。奥底深い所まで飛び込んでみると泳ぎやすいようなもので、人の心も奥深く入ってみると、しみじみと味わうことができます。

皆様も、どうかよく人の心を味わって下さい。それが心の栄養になります。そして心に味がついてまいります。味のある人はそれだけ人に愛されます。

世の中にはたしかに味のある人がいます。独特の雰囲気を持っていて、しかしそれを人に押しつけるのではなく、みんなを受け入れてくれて、あたたかくて、なんとなく懐かしくて、魅かれる、そんな人と言っていていいでしょうか。

しかし考えてみると、味のない人はいないのではないのでしょうか。十人十色ですから、人それぞれにその人の味を持っているはずなんです。なにあえて「味のある人」というのは、味の濃い人、いわばキャラの立っている人をいうので



しょうか。どうもそうではないですね。

むしろ味は濃くないのではないのでしょうか。

だから「〇〇の味」とは言えないけれども、言  
いようのないおいしきを持っている、そういう  
ことではないでしょうか。

そのような、「言いようのないおいしき」の味  
が持てるようになったのは、多くの人の心を味  
わつてきたからなのでしょう。

世の中には、人に迷惑をかけて平気な人もい  
ます。「酔っぱらって暴言をばく人」もいます。  
そういう人に対しては、困った人だと批判しな  
がら、冷ややかな目を向けてやり過ぎるのが普  
通です。

しかしそういう人にもあたたかい目をそそい  
で、その人の心の深い所を味わってみる。する  
とご苦労様だと思える。そういう経験が、い  
わば隠し味となつて、「味のある人」をつくつて  
いくのではないのでしょうか。

(3) 人と人との和がいかにかに大切であるかにつ

いては論をまたない。いかにして和をつく  
るか、その根本は、人が人に和するという  
ことの前にあるべき、神慮への合一であり、  
誠への一心である。

人と和そうと思う限りにおいては、あの  
人はどう、この人はどうというような情に  
とらわれる。情を無視してこの世はありえ  
ないが、情にとらわれていては、肝心の協  
力があるはずがない。

手の指も、親指の腹とは、どの指の腹も合  
うが、ほかの指の腹どうしは合いません。そ  
のように人と人は合わなくても、一人一人  
が神慮に合一することによって、和が生み  
出されるのです。

「和をもつて尊しとなす」―聖徳太子の昔か  
ら、日本人が最も大切にしてきた精神です。し

かし人にはそれぞれの立場、考えがありますから、意見が対立することがしばしばです。そのとき、力の強い方が、力づくで弱い方を従わせたのでは、本当の和とは言えないでしょう。

二人の意見が対立した場合、二人が共に信頼する第三者の知恵を借りるというのが一つの方法です。いわば人差し指と中指が対立したとき、それぞれが親指と腹を合わせることによって、人差し指と中指が間接的に腹を合わせるというわけです。



人ではなくて目的や理念というものも、親指の役割をしてくれます。意見が対立したとき、お互いに冷静になって、そもそも自分たちが望んでいることは何なのか、目的とするところは何なのかに立ち返ってみる。そうすることによって、お互いが納得できる結論を見いだすことができるでしょう。

人との意見の対立ばかりでなく、自分の中の考えの対立、葛藤、迷いするときこそ、この親指に当たるものを持っているかどうか重要です。

人生において一番大事なものは何なのか、生きていく中で最も重視すべきものは何なのか、自分の行動を決める、最終的な判断の拠りどころは何なのか。

このような「親指」を自分の中に確立することこそが人生の重大事といえるのではないでしょうが。

(4) 難しいことを難しく教えているのではない。難しいことを、何心なくやさしく行う、これが誠である。難しいことをなお難しくするのは理論、理屈である。すなおに、何心なく行えるような人になっていただきたい。人格の完成はそこにある。

お相撲さんは、腋（わき）にワラを一本はさんでけいこをするということを知ったことがあります。腋が少しでもゆるむとワラが落ちてしまいますから、意識してワラを落とさないようにすることで、腋をしめるという基本の基を身につけるといふことでした。それが身につけてしまえば、ワラはなくても自然に腋をしめて相撲がとれるでしょう。

私たちは、自分がいま何をなすべきか、なすべきでないか、あれこれと考えます。こうすればどうなるか、ああすればどうなるか。しなけ

ればどうなるか。どちらが損か得か、人にどう思われるか、…、神様にはどう思われるか、…、そもそもなぜ自分がこういう状況におかれているのか。自分が、あるいは誰かが何をした結果なのか…。

考えることは大事なことであり、必要なことです。考えて結論が得られれば、それにしたがって行動できます。「こうすべきだ」と考えたことをその通り実行することは立派なことですが、ただそこには窮屈さ、苦しさがありません。

また理屈はつけようと思えば何とでもつけられますので、理屈をこねまわして物事をこんがらからせる場合もありますし、あるいは自分に都合のいいように、楽な方に、自分で自分を誘導することもできます。

「こうすべきだ」と考えて、その行動をとるといふのは、いわばワラを腋にはさんでけいこするようなもので、それが身につけば、考えな

くても、自然にスツとそういう行動をとることが  
ができるようになるでしょう。そうなるまでに  
は、意識して行いうけいを積み重ねることが必  
要です。

「こうすべきだから」でもなく、「神様に認め  
てもらえるから」とさえ思う間もなく、無心に、  
自然に、スツと行いう。誠とは、そのような姿を  
指しているのではないでしょうか。



今年の二月は、雪が多かったですね。雪国ば  
かりでなく、各地で記録的な大雪がありました。  
都心でも積りました。銀世界は美しいですね。  
純粹無垢という言葉そのものです。

人の心もそうあるのが理想ですけれども、そ  
ういうわけにはいきません。そこで人生にはい  
ろいろなことがあり、喜・怒・哀・楽に事欠き  
ません。そういう中でも、確かな手ごたえをも  
つて生きていきたいものです。

カットは、前号と同じく齋藤啓子さんが、ご  
自身の卒業制作でせわしい中、描いてくださ  
いました。感謝です。

次号は 10 月 1 日発行です。

(H・Y)

## 編集後記

平成 26 年 3 月 1 日 ふゆのあり 651 号付録 ぷらす α 平成 26 年春号 (通巻 98 号) 編集・発行人 山本博也  
発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町 3-11-1 修養団捧誠会青少年担当 TEL 03-3971-1493